
東方 紅魔館物語

SESERAGI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 紅魔館物語

【Zコード】

Z6239Y

【作者名】

SESERAGI

【あらすじ】

瀬世羅木 努青年が幻想郷の紅魔館に来る物語。物語を考えてた瀬世羅木は物語が思い浮かぶ困つてしまつ。目を瞑り気が付くとそこは見た事の無い森だつた。瀬世羅木は森を出て大きな建物がある。それが幻想郷に出る紅魔館だと知る。紅魔館の人物達に会う瀬世羅木。彼の運命は、そして彼は現実世界に戻れるのか。

登場人物（前書き）

初めまして。作者のSESERAGIです。長文で失礼します。前作を見て頂いた方はありがとうございます。今回は連載と言う形で物語を書かせて戴きます。なので連載される迄の間が空きすぎと思われる方も出てくると思います。今回から小説の書き方を替えて行きます。小説を読まれる際の注意事項。原作のキャラクターを使用させて戴いております。この物語でキャラクターの言動、行動、性格、その他が原作と違うと思われるかたがいると思います。ご了承下さい。

登場人物

瀬世羅木 努

物語の主人公です。20代の青年で趣味で自作の物語を考えている。

レミリア・スカーレット

物語の副主人公です。紅魔館の主で吸血鬼。少女の姿をしているが何百年と生きている。

フランドール・スカーレット

紅魔館の主のレミリア・スカーレットの妹。何を考へてか分からぬ破壊的行動を取る事からレミリアに地下牢に入れられてる。少女の姿をしているが何百年と生きている。

十六夜 咲夜

紅魔館の主のレミリア・スカーレットに頼むすメイド長。20代位の女性。

パチュリー・ノーレッジ

紅魔館のレミリア・スカーレットの友人で図書館長。魔法使い。少女の姿をしているが何百年と生きている。

紅美鈴

紅魔館の門番を担当する中国人。20代位の女性に見えるが何百年と生きている。門番をサボり咲夜にお仕置きを受ける時がある。

小悪魔

紅魔館の図書館長のパチュリー・ノーレッジの同書。20代位の女性に見える。

初めての体験

空は星が出る夕の空、満月も出ている。

少し新しいアパートが見える。

その一室で一人の青年がパソコンをじっと見てる。

青年「・・・。」

パソコンを見て悩んでる。

青年「趣味で物語を書いひとつとこむなど題名だけでもうとも物語が
思い浮かばないよ。」

パソコンには「東方紅魔館物語」と書かれてる。

青年「少し休憩しよう。」

青年は台所に行つて冷蔵庫を開け紅茶を出してラップに淹れた。

青年は紅茶を飲む。

青年「・・・紅茶と言えば、やっぱつコレコトだな。」

青年は物語を考えながら紅茶を飲んでる。

「ピンポン」

チャイムの音だ。青年が返事をする。

青年「はーい！」

「瀬世羅木さんのお宅ですか？」

声がする。青年が玄関を開けた。

「はい、瀬世羅木です。」

青年、瀬世羅木が玄関の外に立つ人物を見る。

瀬世羅木「宅配便の方ですか。」

宅配便の男性は頷く。

宅配便「お待たせした品をお持ちしました。」

瀬世羅木は品を受け取る。

瀬世羅木は宅配便の方にサインを書いて玄関を閉めた。

瀬世羅木が品物の入ってる袋を見る。

瀬世羅木「待っていたんだよな。」

瀬世羅木は袋を開ける。中にレギュラースカーレットのライターが入っている。

瀬世羅木は中の物を取り出す。

瀬世羅木「さすがネットオークション探せば何でも在るもんだな。」

瀬世羅木はライターをポケットに閉めた。

瀬世羅木「よし、休憩はもう良いから。続き、続き。」

瀬世羅木はパソコンの在る所に戻る。

瀬世羅木「よし、書くぞー。」

瀬世羅木はパソコンを打つ。

1時間後。

瀬世羅木「ぬわあああ！駄目だ全然思い浮かばない！」

瀬世羅木はキーボードをどかして顔を置いた。

瀬世羅木「もう、夜中の10時か。少し目を開けて頭の整頓でもしよう。」

瀬世羅木は目を開いた。

瀬世羅木「……。」

突然、肌に寒さを感じ目を開けた。

瀬世羅木「どう・・・なっているんだ??」

瀬世羅木は驚いた、そこは見た事の無い森の中だ。

瀬世羅木「何て事だ。・・・取りあえず適当に歩くぞ。」

瀬世羅木は森の中を歩く。出口が見えて来た。

瀬世羅木「よし!。出口だ。」

瀬世羅木は走る。

瀬世羅木は森を出た。

瀬世羅木「何だ?。この大きな建物は・・・。」

瀬世羅木は目を疑う、目線の先に大きなレンガで造られた建物がある。

「ガーン!…ガーン!…」

建物の鐘が鳴る。

瀬世羅木はこの建物に見覚えのある表情を浮かべる。

瀬世羅木「…まさか、これは、紅魔館?」

瀬世羅木は右手で頬っぺたを引っ張った。

瀬世羅木「イツ テーテツ!」

痛みを感じる。

瀬世羅木「夢では無い・・・。」

瀬世羅木はいつも肌にはなさず持つていて携帯を出した。

携帯で紅魔館と検索して画像を見る。画像と建物が一致する。

瀬世羅木「・・・こんな、こんな事は初めてだ。俺はビックやうゲームの・・幻想郷の世界に来てしました・・・。」

瀬世羅木はただ呆然と立っている。

瀬世羅木「これも何かの巡り合わせだ、せっかく今、こうして紅魔館の前にいるんだ。俺が願つても会えなかつた人物に会える絶好のチャンスだ！！」

瀬世羅木は門の方に走つて行つた。これから彼の運命が変わるとも知らずに。

初めての体験（後書き）

第1章は、主人公だけの登場になつてしましました。次回からはいよいよ、門番やらメイドやら主やら続々登場します。瀬世羅木は果たしてどうなるのか。次回にご期待あれ。

侵入者扱い

瀬世羅木は門の前に着いた。

緑色の服を着た中国人風な女性が立っている。

女性は立つたままの状態で眠っている。

瀬世羅木「俺の記憶が合つてればこの女性は紅美鈴・・・」

瀬世羅木はまじまじと見る。

瀬世羅木「随分、器用な人だな。立つたまま寝るなんて・・・」

瀬世羅木は女性の前に立つ。

瀬世羅木「美鈴さんが起きてくれないと入るにも入れないな。」

瀬世羅木は美鈴の肩に手を置いて揺らした。

瀬世羅木「すいません！起きて貰えますか。」

瀬世羅木は彼女を強く揺らす。

「バキッ！」

美鈴の右パンチが瀬世羅木の顔に直撃した。

瀬世羅木「いつてえ――――！」

骨にヒビが入る程の力で殴られた。

瀬世羅木は自分の顔をなせる。

瀬世羅木「・・・恐ろしいパワーだ…。下手に起こさない方が良いな。」

美鈴はまだ眠っている。

瀬世羅木は門を開けて中に入った。

瀬世羅木「これじや、不法侵入だな…。」

瀬世羅木は歩く。大きな扉が在る。

瀬世羅木「さすがにここからは無断に入れないと。」

瀬世羅木は門を叩こうとした。

その瞬間。

瀬世羅木の背後から首もとにナイフを当てられた。

瀬世羅木「！…！」

瀬世羅木はその場で固まつた。

? 「この館を知つての不法侵入?」

女性の声だ。

瀬世羅木「・・・その声は十六夜咲夜さんですね。」

あくまで記憶上の事で言つてゐる。女性が返事を返す。

女性「なんで私の名前を知つてるかは知らないけど、貴方には来て貰うわよ。」

瀬世羅木「分かった。」

瀬世羅木は咲夜に連れられ館の中に入る。

階段を上がり長い廊下を渡る、そして扉の前で止まる。

咲夜「お嬢様、侵入者をお連れしました。」

扉を開けて部屋に入る。

瀬世羅木は部屋に座つている女性を見て驚いた。それは、自分が一番に会いたい人レミリアスカーレットその本人が座つているからだ。だがこの状況下でそれを喜べなかつた。一つ間違えたら自分は殺されるかも知れない。そう思つたからだ。

レミリア「貴方に聞くわ。不法侵入した訳を話してくれないかしら？」

少女見たいな声で聞こえる。だがその言葉には強い威圧感を感じる。

瀬世羅木「レミリアスカーレット殿、不法侵入をしたことは謝ります。」

レミリアが首を傾げる。

レミリア「何で私の名前を知ってるかは分からないけど、答えが間違ってるわね。私は訳を聞いてるのよ…。」

「…」
ゾーイー一般的の少女の声だが恐ろしく聞こえる。

咲夜「お嬢様、先程この侵入者、私の名前も当てたんですよ。もしかして私達が忘れてるだけで実は会った事がある人かと？」

レミリアは首を横に振る。

レミリア「いいえ、咲夜、私は一度も会った事は無いわ。・・・名前を知つてるのは、どうせ誰かから聞いたんじゃないの？」

咲夜は頷く。

瀬世羅木「話しても信じてくれるか分かりませんが、自分はこの世界から違う世界から来ました。どうやって来たと言われても自分でも分からんないです。」

瀬世羅木は懸命に話す。

咲夜が瀬世羅木の首もとにナイフをまた当てた。

咲夜「そんないい加減な話をよくもお嬢様に…死になさい…。」「…」

咲夜が瀬世羅木の首を切り落とした。

その前に。

レミコア「咲夜…。まだ、殺すのは止めなさい。」

咲夜は動きを止めた。

瀬世羅木の心臓の鼓動が速くなる。

瀬世羅木「いっしつ今、ほつ本当に殺されるとひがだつた。」

顔から冷や汗をだし心の中で言つ。

瀬世羅木「恐ろじ過ぎる。自分の世界では尊敬するキャラクターだが、いざ自分がターゲットにされていると想つとこれ程までに恐ろしことは思わなかつた。」

瀬世羅木は動搖を隠しきれて無い。

レミコアが見る。

レミコア「貴方が違う世界から来たのは信じるわ。幻想郷の皆は、まずそんなに怯えないからね。」

瀬世羅木「いや、まづ、俺の立場に立たされたら幻想郷の者でも怯えると思つけど…。」

心の中で弦ぐ。

レミコア「咲夜、この男をフランのいる地下牢に入れてあげなさい。」

「

その言葉に瀬世羅木は震えた。

瀬世羅木「……フランって、貴方様の妹に殺されると云ひ事ですね……。」

レミコアは微笑む。

レミコア「フランの事も知つていてるのね。なら話しあ早いわ。そう、貴方の運命はもう決まっているのよ……。」

咲夜が瀬世羅木を掴む。

瀬世羅木「何て事だ……俺は一番に尊敬している人物のレミリアに死の運命をかけられるなんて……。」

瀬世羅木はうつ向き、そのまま咲夜に連れられ部屋を出された。

レミコアが紅茶を飲む。

レミコア「フラン。たっぷり遊んであげるのよ……。」

レミコアが又も微笑んだ。

侵入者扱い（後書き）

いよいよ第2章も終了しました。瀬世羅木はフランのいる地下牢に連れて行かれる。彼は一体、どうなってしまうのか。次回は「奇跡を呼ぶ宅配物」でお会いしましょう。

奇跡を呼ぶ宅配物

瀬世羅木は咲夜に地下牢に連れて行かれてる。

瀬世羅木「・・・。」

瀬世羅木はうつ向いたままだ。

階段をおりる。

辺りは暗い闇の中だ。

瀬世羅木「地下なのに随分暑いな・・・。」

咲夜は瀬世羅木を奥の方まで連れて行く。

突き当たりに鉄の扉が在る。

鍵はかかっていない。

咲夜が扉を開ける。

咲夜「入りなさい。」

瀬世羅木は中に入った。

咲夜が外から扉を閉める。

瀬世羅木「・・・フランのいる地下牢...。」

瀬世羅木の体は震えてる。

? 「・・ふふふ。」

女性の声だ。

瀬世羅木は声のする方を向く。

瀬世羅木は今度こそ完全に震えた。

瀬世羅木の目線の先にフランドール・スカーレットその本人が立つ
ているからだ。目を輝かせて。

フラン「貴方はどんな風に壊されたい?...」

恐ろしく聞こえる少女の声だ。

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「・・・フラン。壊すと言う事は俺を殺すんだな?...」

フランが微笑む。

フラン「こんな地下牢にいる私の名前を知ってるのね?...お姉
様から聞いたんでしょ?...」

瀬世羅木は首を横に振る。

瀬世羅木「いや、その前から知ってる。俺の尊敬する人物の一人だ

から…。」

フランが首を傾げる。

フラン「どこの誰か分からぬ人間に尊敬されても困るわ…。」

瀬世羅木「！…！」

フランの体から赤いオーラが出る。

フラン「跡形も無く壊してあげるわ…！」

フランの握る両手が輝く。

瀬世羅木「まつまづい…本当に殺される…。」

瀬世羅木は下がる。

フランの両手は瀬世羅木に向けられた。

フラン「ふふ…。」

フランは恐怖におののく瀬世羅木の顔を見て喜んでる。

フランが両手を広げた。

フラン「スター・ボウブレイク！…。」

瀬世羅木は物凄い光に包まれ様とする。

瀬世羅木「・・・死んだ・・・。」

瀬世羅木は光に包まれた。

フラン「ふふふ…跡形も無くなつたわね」

光が止む。フランが瀬世羅木の立つていた所を見る。

フラン「！…！。・・・なんで？！。」

フランが瀬世羅木の立つていた所を見て驚いた。

瀬世羅木はキズ一つ無かつた。

瀬世羅木「・・・どうなつてゐるんだ？…。」

瀬世羅木は体を触る。

瀬世羅木「キズ一つ無い…。」

瀬世羅木「！…！」

瀬世羅木の右ポケットが光つてる。

瀬世羅木はポケットに手を入れて光つてる物を出した。

瀬世羅木「これは！…。」

それは瀬世羅木が宅配物で届いた品。レミリアスカーレットのライターだ。

瀬世羅木「ただのライターなのにビビしてだ？。」

だが今はそれを気にするのは止めた。ただ運が良かつた、そつ思ひだけにした。

フラン「浴びせ攻撃が効かないなら、直接攻撃よーー。」

フランは右手にレーヴァテインを出し瀬世羅木の頭上に振り上げる。

フラン「死になさい！ー！」

瀬世羅木「くつー。」

フランはレーヴァテインを降り下ろした。

「ガキーーーン！ー。」

レーヴァテインは瀬世羅木の頭に直撃した。だが・・・。

瀬世羅木「痛く無い…。」

瀬世羅木はレーヴァテインを退かし頭を触った。

フラン「どうしてー、どうしてー何も効かないのー。」

瀬世羅木はフランを見る。

瀬世羅木「どうやら俺は特別な力で守られてる様だ。・・・だけどおかしいな美鈴さんのパンチは効いたんだけどな？」

フランがうつ向いた。

フラン「……どうやら、貴方を殺すのはお姉様に任せんしかないわね……。」

フランはもう言つと目を閉じた。

扉が開いてレミリアスカーレットが入つて來た。

レミリア「フラン。事情は貴方の心の声で聞いたわ。この男は貴方では無理の様ね。」

レミリアは瀬世羅木の前に立つ。

瀬世羅木「レミリア……。なんて事だ、主と闘つはめになるなんて……。」

レミリアは瀬世羅木を睨む。瀬世羅木はそれを見る。

奇跡を呼ぶ宅配物（後書き）

第3章も終了しました。瀬世羅木はレミリアと闘う事になる。はたして、彼の新たに持つたと言う力でレミリアの力を止める事が出来るのか。次回は「主の力と涙で」でお会いしましょう。

主の力と涙で

瀬世羅木はレミリアの前に立っている。

瀬世羅木「レミリア殿、俺が一番に尊敬する人物なのに、どうしてこんな事に・・・。」

瀬世羅木はうつ向いた。

レミリア「貴方には特別な力がかかつているのはフランから聞いたわ。・・・でも、その力が私に通用するかしら?」

レミリアの体からオーラが出る。

レミリア「覚悟しなさい!!。」

レミリアは右手を広げた。

瀬世羅木「・・・そつそれは.....、グングニル...。」

瀬世羅木はレミリアの握るグングニルを見る。

そのグングニルは自分の知る限りのグングニルとは違い余りに大きすぎる。

レミリア「この事も知っているのね・・・でもこれの痛みは分からぬでしょ?」

レミリアの瞳が輝く。

瀬世羅木は大量の冷や汗が出る。

瀬世羅木「……グングニル…。まさかそれを俺が喰らう事になるとは…。」

瀬世羅木「！…！」

ポケツトに入っているライターが猛烈に輝く。

レミリア「貴方を守る力の源はそれね。」

レミリアが右腕を上げグングニルの先端を瀬世羅木に向かた。

レミリア「消滅しなさい……。」

レミリアはグングニルの握る右腕を最高に勢いをつけた。

瀬世羅木「来る…！」

レミリアはグングニルを投げた。

物凄い衝撃波を放つ。

瀬世羅木の所に一直線に飛ぶグングニル。

瀬世羅木は無駄だとは分かっているが両手を前に出した。

瀬世羅木「絶対に受け止める！。俺の尊敬する人物に消されるなんて…。そんな結果は酷すぎる！。」

「ドン！－！」。

グングニルが瀬世羅木の両手の前に止まる。

物凄い熱が伝わる。

瀬世羅木「やつぱり、駄目なのか！。」

瀬世羅木はグングニルの衝撃波で後ろに押される。

レミコア「そろそろ、爆発するこりね…。」

レミコアの言葉通りグングニルは猛烈に輝く。

瀬世羅木「大丈夫だ！」このライターの力さえあれば……。」

瀬世羅木は必死にグングニルの先端を押さえてる。

「ひしつ－！。」

瀬世羅木「えつ？！。」

ポケットのライターにヒビが入った音だ。

瀬世羅木「まずい！－！」。

「ドッカ－ン！－！」。

グングニルは大爆発した。

辺りは凄い煙が立つ。

フランの力でも動じない地下牢の壁にヒビが入った。

レミコア「・・・。」

レミコアが煙の立つ方、瀬世羅木の立っていた方を見る。

煙が止んで来た。

レミコア「フラン、貴方が破壊する筈の男を私が破壊してやったわ。」

レミコアはフランの方を向く。

フラン「・・・おっお姉様.....。」

フランが瀬世羅木の立っていた方を指差す。

レミコアは振り向く。

レミコア「・・・なつ何で.....??。」

レミコアは驚いた。

本来なら消滅してる筈の人物が立っているからだ。

瀬世羅木「・・・、今のは本当に死んだと思ったよ。」

瀬世羅木の両手から血がたつぱり出てる。

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

ライターにはヒビが入ってる。

瀬世羅木「このライターが完全に壊れてたら、俺は完全に消滅してた。」

レミコア「そう、ならもう一発投げたら完全に消滅するのね。」

瀬世羅木はレミコアを見る。

瀬世羅木「これまでか！」

レミコアは又右手を広げた。

だが。

レミコア「やつぱり止めるわ。」

フランが驚く。

フラン「お姉様！何で、相手は弱ってるのよーもう一発喰らわした
ら確実に……。」

フランが言い終える前にレミコアが。

レミコア「いいえフラン、だから尚更によ。ただの人間で私のグン
グールを喰らっても生きている。そんな事は初めてだわ。」

レミコアが瀬世羅木の方を向く。

レミコア「貴方にもう一度聞くわ、貴方は館に不法侵入したのでは無く此所に様が有つて来たのでしょ？」

瀬世羅木「・・そうです。紅魔館の方々の物語を書こうと思つてこの紅魔館にきました。」

レミコアは微笑む。

レミコア「そう……物語を書く為に。なら貴方は立派なお客様ね。」

レミコアはハンカチを瀬世羅木に渡した。

瀬世羅木「レミコア殿、これはハンカチ……。」

レミコア「両手の止血用よ。貴方にあげるわ。」

瀬世羅木は涙が出る。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

瀬世羅木はハンカチで手を拭いた。

レミコア「まだ、貴方の名前を聞いて無かつたわね。」

瀬世羅木「俺の名前は瀬世羅木努です。」

レミコア「私の名前は知つてゐると思つけど言つわ。私はレミコア

スカーレット。そして妹のフランドール。」

瀬世羅木は頷く。

レミリア「後、貴方が接しやすい喋り方で良いわ。貴方は私達の大
切なお客様だから。」

瀬世羅木は血濡れのハンカチで涙を拭いた。

瀬世羅木「分かりました。」

レミリアは又、微笑む。

フランが瀬世羅木に近づく。

フラン「ふーん、何か男なのに弱そうに見える。」

フランは瀬世羅木の腰を叩いた。

瀬世羅木「あああああーーー。」

激痛が走る。先程のグングニルの影響だ。

レミリア「フラン、駄目よーーー。」

フラン「ふふふーーー。」

フランが微笑む。

瀬世羅木はレミリアとフランを見る。

瀬世羅木「一時はどうなるかと思つたけど何とか訳を分かつてくれた。
」

瀬世羅木はほつとした顔になる。

これからが彼の人生を大きく変える。

#の力と涙で（後書き）

第4章も終りました。瀬世羅木は何とかレミリア達に理解して貰う事が出来ました。だけど彼はこれからが大変、物語を書いて行く彼に驚く事が。次回は図書館長と司書がいよいよ登場する。次回、「紅魔館の図書館」でお会いしましょう。

紅魔館の図書館

瀬世羅木はレミコアの部屋の椅子に座っている。

瀬世羅木「なんか、緊張しますね。」

レミコアが瀬世羅木を見る。

レミコア「緊張してる様ね、咲夜に紅茶でも淹れて貰う様に言つわ。」

レミコアは咲夜を呼んだ。

咲夜が来る。

レミコア「彼が貴方に頼みたい事があるみたいよ。」

咲夜が瀬世羅木の方に行く。

瀬世羅木「えつ？」

レミコアが微笑む。

レミコア「瀬世羅木、咲夜に紅茶をお願いするんじやなかつたのか
しりへ。」

瀬世羅木「えつ。自分が頼むんですか？！」

瀬世羅木の心臓の鼓動が早くなる。

瀬世羅木「余計に緊張せられるな。それこそつ怖い田にあつたし。」

瀬世羅木は咲夜の方を向く。

咲夜は微笑んでる。

とてもわざと、自分が殺されそつにあつた時の表情とは思えない表情だ。

咲夜「もしかして、私が恐ろしく見えるのですね。」

図星を突かれた。

瀬世羅木「そつそれは……。」

咲夜「どうやら当たつているみたいですね。心配要りません、あんな表情をするのは滅多に有りませんから。」

瀬世羅木は椅子に座つてこくなつてゐる。

咲夜「紅茶で良いんですね？」

レニア「咲夜、あの紅茶を淹れてあげなさい。」

咲夜は部屋を出た。

レミリア「瀬世羅木、体の痛みは取れた?」

さつきのグングールの事を聞いてる。

瀬世羅木は体を動かす。

「ズキッズキッ。」

レミリア「ズキズキ聞こえるわね。ごめんなさいね、本気で投げてしまつて。」

瀬世羅木「いや、こんなのは時間が経てば治ります。」

咲夜が部屋に入つて来た。

咲夜はカップに紅茶を淹れてる。

紅茶を渡された。

レミリアも紅茶を持つ。

瀬世羅木「いただきます。」

瀬世羅木は紅茶を見る。

瀬世羅木「随分紅いな。」

瀬世羅木は紅茶を飲む。

レミリア「私の血のブレンドよ。」

！！！。

紅茶が喉につつかえた。

瀬世羅木「（ほつ）（ほつ）ーー。」

レミリアが笑う。

レミリア「冗談よ。」

瀬世羅木「びっくりしましたよ。・・・でもレミリアの血を飲むと吸血鬼に成って永遠に生きれるって話は本当何ですか？」

レミリアが頷く。

レミリア「貴方以外と物知りね。そうよ、私の血を飲めば吸血鬼になつて永遠に生きれるのよ。」

瀬世羅木「よして下せこよ。それは永遠に生きれるって言つのは興味有るけど、吸血鬼になるのは……。」

瀬世羅木とレミリアは笑った。

紅茶を飲み終えレミリアが。

レミリア「物語を書く為に来たのでしょ。ならうつてつけの所があるわ。」

レミリアは立ち上がった。瀬世羅木も立ち上がった。

レミコア「付いてきなさい。」

レミコアと瀬世羅木は部屋を出た。

長い廊下を渡り階段をおりる。

瀬世羅木「この扉は！！」

レミコア「あら、知つてゐみたいね。そういう、この先がこの紅魔館の図書館よ。」

レミコアは扉を押す。

瀬世羅木とレミコアは部屋に入る。

瀬世羅木は驚いた。

凄い本棚が立ちはだかる。

小悪魔「レミリア様。」

瀬世羅木は小悪魔を見る。

瀬世羅木「小悪魔か、つと聞ひとせいいの館長もこる筈。」

瀬世羅木は周りを見る。

レミコア「小悪魔、パチエは何処にいるのかしら？」

小悪魔「今、呼びます。」

暫くして小悪魔がパチュリー・ノーレッジを連れて來た。

パチュリー「レニア。どうしたの?」

眼鏡をかけた、レニアと変わらない少女だ。

レニア「パチエ、彼の名前は瀬世羅木努、彼に此所の本を読むのを許可してあげる?。」

パチュリー「駄目よ!-!。」

レニア「何で??.」

パチュリー「此所の本は幻想郷の全ての歴史やら魔法書まで置かれてる。それをまったく知らない者に見せる訳にはいかないわ!。」

レニア「パチエ!そこを何とかお願ひよ。」

パチュリー「駄目よ!-!。どうしてもと叫うなり、その男性、私と小悪魔を倒してからこしなさい!-!。」

レニア「何を言つてゐの?パチエ!。彼が勝てる訳が無いでしょ?」

パチュリー「彼の思いを見せて貰うだけよ、でも殺す氣でかかるけどね。」

パチュリーと小悪魔に睨まれる。

瀬世羅木が立つ。

瀬世羅木「なんで、俺は闘いと言つ運命から離れてくれないんだ…」
「…」

レミコアも隣に立つ。

レミコア「さつき私は貴方にグングニルを投げた責任がある。いま
も痛むその体で一人に勝つのは不可能よ。」

だが瀬世羅木はレミリアの方を向いて首を横に振った。

瀬世羅木「レミコア、こゝには俺一人でやらせてくれ。」

レミコア「何を言つてゐのよー・自殺行為よー。」

瀬世羅木はパチュリーと小悪魔の前に立つた。

パチュリー「行きますよ、小悪魔。」

小悪魔「はいー。」

パチュリーと小悪魔はいっせいに瀬世羅木にかかる。

紅魔館の図書館（後書き）

第5章も終了しました。瀬世羅木は図書館の本を見せて貰うのにパチュリーと小悪魔と勝負をする。彼は果たして一人に勝つ事は出来るのか。次回は「友情」で会いましょう。

友情

パチュリーと小悪魔はいつせいに瀬世羅木にかかる。

瀬世羅木「レミリアに一人でやらせてくれと言つたのは良いけど…この状況はまずいかもしれないな。」

パチュリーと小悪魔から凄い殺氣を感じる。

パチュリー「小悪魔！貴方は彼の動きを封じて！。」

小悪魔「分かりました！」

パチュリーと小悪魔は別れる。

瀬世羅木「俺の守られてる力はさつきのグングールで駄目になつたから…いやまたよ、もしかしたらまだ守られてるかも知れない！」

レミリアは瀬世羅木を見る。

レミリア「…瀬世羅木、貴方は本当に普通の人間よ。パチエ達に勝つのは絶対に無理だわ。」

レミリアはパチュリー達を見る。

瀬世羅木は本棚の方に走る。

瀬世羅木「さすがにパチュリーさんもこの本棚目掛けて攻撃はしないだろ？？」

小悪魔「無駄ですよ！」

瀬世羅木「何？！。」

瀬世羅木は小悪魔に捕まれた。

瀬世羅木「・・・無駄だと言うのはどういう...。」

小悪魔「此所の本全てはパチュリー様の力で守られています。なので
パチュリー様の攻撃は動じません！」

瀬世羅木は力一杯小悪魔の腕を外そうとした。

瀬世羅木「びつ、びくともしない.....。」

小悪魔の力はとても女性の力とは思えない力だ。

瀬世羅木「それに、俺は非力だからな。」

パチュリーが瀬世羅木の前に立った。

パチュリー「小悪魔！私が魔法を放つたら直ぐにどくのよー。」

小悪魔は頷く。

瀬世羅木「くつそーーー！」

瀬世羅木は必死に小悪魔の腕を外そうするが全く駄目だ。

パチュリー「……日符……」

瀬世羅木は震える。

瀬世羅木「そつそれは……」

パチュリー「ロイヤルフレア……」

物凄い閃光が瀬世羅木をのみこむ。

瀬世羅木「……」

小悪魔の腕が外れた。

だが、この状況から逃げれない。

閃光は完全に瀬世羅木をのみこんだ。

パチュリーと小悪魔はロイヤルフレアを放った先、瀬世羅木の立っている方を見る。

閃光は止みパチュリーと小悪魔が見る。

パチュリー「……」

小悪魔「……」

瀬世羅木は立っている。だが酷いキズだ。

瀬世羅木「ぐつ……」

瀬世羅木は床に量びざがつく。

瀬世羅木はポケットに手を入れる。

瀬世羅木「・・・。」

ポケットから出しライターを見ると大きなビビが入つて中のオイル
が少し出でてくる。

瀬世羅木「つつ、次はもう、無いな.....。」

パチュリーが又も瀬世羅木の前に立つ。

パチュリー「ロイヤルフレア、一回では駄目ね。ならもう一度.....。」

パチュリー「日符.....。」

瀬世羅木はうつ向く。

パチュリー「ロイヤルフレア！！」

又も閃光が出る。

瀬世羅木「今度こそ.....完全に終わつた.....。」

ロイヤルフレアは瀬世羅木をまたのみこむ。

パチュリー「さすがに一回もうければ跡形も無くなつたでしょ？」

パチュリーが小悪魔を向く。

小悪魔「パ、パチュリー様… まづい事になつてます。」

パチュリーが瀬世羅木の立つてゐる方を向く。

パチュリー「…レミア…。」

パチュリーがロイヤルフレアを放つた先、瀬世羅木の立つ前にレミアが立つてゐる。

レミア「パチエ、もう終わりよ。」

瀬世羅木がレミアを見る。

レミアはキズ一つ無い。

パチュリー「レミア！。どうして…そこまでして守る人なの？！」

レミアが微笑む。

レミア「それは、私と貴方と一緒に。私と貴方が友人でいるみたいに瀬世羅木と私も友人だからよ。」

パチュリーはうつ向く。

パチュリー「それは、同じ友人同士、争うな、つと言つことね……。」

「

レミニア「パチエ。彼を信用して、と言うのも無理かも知れないけど…。ここは、貴方からも許可してあげて。」

パチュリーは考へてる。

パチュリー「小悪魔、貴方はどうなの？」

小悪魔「私は、パチュリー様が良いとおっしゃええば。」

パチュリーは瀬世羅木の方に行く。

パチュリー「貴方の名前は？」

瀬世羅木「・・瀬世羅木努です。」

少し苦しい声で言つ。

パチュリー「瀬世羅木努。私は、パチュリーノーレッジ。そして小惡魔ね。」

小惡魔が頭を下げる。

瀬世羅木は立ち上がりうつとする。

だが。

瀬世羅木「ああああああーー！」

又も激痛が走る。

パチュリー「貴方の怪我は私が責任を持つて治します。」

瀬世羅木「・・・ありがとうございます。」

レミリア「パチ。ありがとうございます。」

レミリアが微笑む。

パチュリー「良いわよ。レミアの言つ友情。それは、貴方が彼をか
ばつた事で分かつたわ。」

パチュリーは瀬世羅木を見て微笑む。

瀬世羅木「・・・良かつた・・・。」

瀬世羅木はほつとした。

友情（後書き）

第6章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーと小悪魔から図書館の本を見せて貰う事を許されました。彼はこれから、物語を紙に書いていく。次回は「読めない本」でお会いしましょう。

読めない本

パチュリーはキズだらけになつた瀬世羅木を座らせ本を見る。

パチュリー「治療法、治療法は…。」

パチュリーがページをずつと捲る。

パチュリー「…これね。」

パチュリーは何か言つている。

瀬世羅木「・・本当に治るのかな?」

レミリア「大丈夫よ。何て言つたて何でも物知りのパチエなんだか

う。

瀬世羅木「！…！」

瀬世羅木の体が輝く。

瀬世羅木のキズが消えていく。破れてる服も治つてきてる。

瀬世羅木「すつ凄い。」

瀬世羅木は体を動かす。

瀬世羅木「さつきの痛みがうそみたいだ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方の怪我は完全に治ったわ。・・・だけど、私以外の者が負わせた怪我があつたみたいだけど?」

パチュリーがレミコアを見る。

レミコア「分かちやつた。」

レミコアは視線を瀬世羅木に向ける。

パチュリー「分かちやつた。と言つ事は何かしたのね?」

レミコアの表情が変わつた。

レミコア「・・・グングニルを一度だけ」。

レミコアが申し無さげな顔で瀬世羅木を見る。

瀬世羅木「いやあ、そんなに気にしなくつて良じよ。」

パチュリー「瀬世羅木、貴方それでよく生きてるわね。」

瀬世羅木「いや、それはこれのおかげだよ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れてライターを出した。

パチュリー「レミコアが[写]つてるわね・・・。ちよつと貸して?」

瀬世羅木はライターをパチュリーに渡した。

パチュリー「・・・凄い力が込められてるわ。」

パチュリーがライターをまじまじと見る。

瀬世羅木「でも、それ自分の世界では普通のライターですよ。」

パチュリーがライターを瀬世羅木に返す。

パチュリー「どうやら、それは幻想郷に来た事で特別な力を手に入れたのかも知れないわ。」

レミリア「瀬世羅木、それのおかげで貴方はフランにも殺されずに済んだよね。」

瀬世羅木はライターをポケットにしまった。

「キーンコーンカーン。」

時計の鐘の音だ。

皆は時計を見る。

瀬世羅木「・・3時になつてゐる・。」

レミリア「もひ、こんな時間!」

パチュリー「さすがに夜更かしね。小悪魔、私は寝るから後は貴方に本の整理を任せるわ。それが終わったら貴方も寝なさい。」

大量の本を持つて飛んでる小悪魔が頷く。

瀬世羅木「レミコアとパチュリー、俺、この図書館で寝ても良いですか？」

レミコア「こんな所で寝たら、不健康になるわよ。」

パチュリー「レミコア…こんな所で、って私は此所でいつも寝てるのよ。それに、不健康になる、って…。」

レミコア「じめんパチュ。悪い意味で言つた訳じゃ無いわ。」

パチュリー「そうなると彼は何処で寝かせるの？」

レミコア「空き部屋は沢山あるわ。」

瀬世羅木「空き部屋、何か申し訳無いな。」

瀬世羅木は自分の頭をなせる。

瀬世羅木とレミコアは図書館を出た。

長い廊下でレミコアが一つの部屋を開けた。

レミコア「適当に使ってくれて良いわ。」

瀬世羅木は頭を下げる。

レミコアは部屋を出た。

瀬世羅木は部屋を見る。

机とベットがある。

瀬世羅木「空き部屋なのに凄く綺麗だな。咲夜さんがいつも掃除をしているからかな。」

瀬世羅木は机に座つて携帯を出す。

瀬世羅木「なんか、検索しよう。」

瀬世羅木は携帯を見る。

瀬世羅木「何でこいつた、圈外だ。でも、此所に来て直ぐの時は三本立つてたぞ。」

瀬世羅木は頭を傾げる。

瀬世羅木「圈外じゃ仕方ない。寝よう。」

瀬世羅木はベットに入る。

瀬世羅木「ベットに寝るなんて、初めてだな。」

瀬世羅木は目を瞑る。

?「Jの、アパートで瀬世羅木努さんの死体が発見されたようです。

?「瀬世羅木さんはどの様に亡くなられたんですか？」

?「何でもパソコンを打つている最中に亡くなつたと思われます。」

瀬世羅木「おい、瀬世羅木努て俺の事じゃないか？」

？「今、瀬世羅木努さんの死体が運ばれてる様です。」

瀬世羅木「うつうそだ。そつそんな筈は無い……。」

警官みたいな人が部屋から出てくる。

瀬世羅木「！――！」

瀬世羅木は驚いた。

目線の先に自分が瀬世羅木努本人が運ばれてるからだ。

瀬世羅木「うそだ、うそだ。」

瀬世羅木は冷や汗が出る。

瀬世羅木「うそだ――――！」

ベットの所で瀬世羅木は目を覚ます。

外から日が出てる。

瀬世羅木「・・・何ていう夢だ。」

瀬世羅木はベットから起き上がる。

机に座る。

瀬世羅木「まさか…俺の世界では俺は死んでるのか?」

考えるのは止めた。あくまで夢だ。

「コソコソ」

扉の叩く音だ。

瀬世羅木は扉の方に行き扉を開ける。

瀬世羅木「咲夜さん。」

咲夜「朝食をお持ちしましたよ。」

咲夜が机に食事を置いてくれてる。

瀬世羅木「ありがとうございます。」

咲夜は微笑み部屋を出た。

瀬世羅木は食事を食べる。

瀬世羅木「俺、凄く少食派なんだよな。」

瀬世羅木は食事を食べ終えた。

瀬世羅木「よしー早速、図書館に行くぞ。」

瀬世羅木は部屋を出て図書館に行く。

図書館の扉を開ける。

瀬世羅木「パチュリーは何処にいるかな?」

瀬世羅木は周りを見る。

パチュリー「後ろよ。」

瀬世羅木は驚いて後ろを振り向く。

瀬世羅木「びっくりしましたよ。」

パチュリーが微笑む。

パチュリー「レミィから頼まれてた物を渡すわ。」

パチュリーはメモ帳と万年筆を渡した。

瀬世羅木「これは。」

パチュリー「物語を書くんだったてね。書くものが無かつたらそれも出来ないからね。」

瀬世羅木「パチュリーありがと。」

パチュリー「此所の本は適当に読んで良いわ。」

瀬世羅木「分かりました。」

瀬世羅木は本棚に入ってる本を見る。

瀬世羅木「まずは、紅魔館の歴史でしょ。」

瀬世羅木は本棚をくまなく探す。

瀬世羅木「あつたー。」

瀬世羅木は本を取る。

本には紅魔館の歴史と書かれてる。

瀬世羅木は本をあける。

瀬世羅木「ふむふむ。」

瀬世羅木はテーブルに座る。

瀬世羅木「成る程、成る程。」

瀬世羅木はメモ帳に書く。

瀬世羅木「よし!。後は…幻想郷の人物でも調べよう。」

瀬世羅木は本棚を見る。

暫く本棚を見る。

瀬世羅木「あれ、無いぞ。パチュリーが持ってるのかな?」

瀬世羅木がパチュリーを探す。

奥にパチュリーが座ってる。

瀬世羅木「パチュリー。幻想郷の歴史を調べたいんだけど。」

パチュリーが本を渡す。

パチュリー「これよ。」

瀬世羅木は本を受けとる。

瀬世羅木は本をあける。

瀬世羅木「えーと、何々。……ん！」

瀬世羅木は本の文字を読む。だが。

瀬世羅木「パチュリー。この本読めない。」

パチュリーが笑う。

パチュリー「どうやら、貴方はこの本と相性が合わないみたいね。」

パチュリーが本を受け取り本を積み重なつて本に置こうとした。

「バラバラ！！」

本が崩れた。

パチュリー「又、やってしまったわ。」

パチュリーが本を片付ける。

瀬世羅木「自分も手伝いますよ。」

瀬世羅木とパチュリーは本を片付ける。

パチュリー「ごめんなさいね。」

瀬世羅木「とんでもないですよ。」

瀬世羅木は本を片付けてる。

一つの本が目に入った。

瀬世羅木はその本を取る。

瀬世羅木は本をあける。

中には名前がずらりと載つてゐる。

パチュリーが驚く。

パチュリー「そつそつその本の中身が読めるの?...。」

パチュリーの声が震えてる。

瀬世羅木「普通に読めますよ。」

パチュリーが真剣な顔になる。

パチュリー「その本は私にも読めない本！！。死んでる人にしか読
めない本なのよ！－！」

瀬世羅木の体が震えた。

本から手を離す。

瀬世羅木「・・・なつ、何だつて……。」

瀬世羅木の顔から大量の冷や汗が出る。

読めない本（後書き）

第7章も終了しました。瀬世羅木はパチュリーに恐ろしい事を聞かされる。彼が見た悪夢、その夢が現実の物になつてしまふのか。次回「運命」でお会いしましょう。

運命（前編）

瀬世羅木は部屋で机に座つてうつ向いてる。

パチュリー「その本は死んでる人しか読めない本なのよ……。」

図書館で言われたあの言葉が頭から離れない。

瀬世羅木「やっぱり、俺は死んでしまったんだな……。」

瀬世羅木はレミリアがくれたハンカチで汗を拭ぐ。

瀬世羅木「……ハンカチ、洗わないとまずいな。」

瀬世羅木はまぎらわせ様とする。

だが、まぎらわす事は出来なかつた。

瀬世羅木「俺の世界で、俺が……。」

瀬世羅木は又、うつ向く。

「コソコソ。」

扉の叩く音だ。

レミリア「瀬世羅木、入るわよ。」

レミリアが入つて來た。

レミコア「…パチエから聞いたわ。貴方が死んでいる人物だと言う事を……。」

瀬世羅木はレミコアを見る。

瀬世羅木「…、そうですか。」

レミコア「瀬世羅木、その事に思いあたる事がある?」

瀬世羅木は冷や汗が出る。

瀬世羅木「…夢…。」

レミコア「え?」

瀬世羅木「夢を見たんだ。俺の世界で、俺が死んでいるのを……。」

瀬世羅木の体は震える。

レミコアが瀬世羅木の肩に手を置く。

レミコア「その夢が、現実に起きた事って言つ訳ね……。」

瀬世羅木は頷く。

レミコアは考てる。

レミコア「瀬世羅木、それは只の夢よ。」

瀬世羅木「・・・。」

瀬世羅木は黙つている。

瀬世羅木は立ち上がる。

瀬世羅木「・・ちょっと、外の空気を吸つてくれる。。。」

「バタン。」

瀬世羅木は部屋を出た。

レミコア「・・瀬世羅木・・・。」

瀬世羅木は紅魔館の門の方に歩いてる。

咲夜「中国！。貴方つて言う人は！！。」

門の外の方から声がする。

美鈴「咲夜さん、そんな恐ろしい表情でナイフを突き付けないで下さい！」

瀬世羅木が門を出る。

美鈴が瀬世羅木を見る。

美鈴「咲夜さん！侵入者がいます！」

咲夜が瀬世羅木を見る。

咲夜「中国！彼は立派なお客様よ！。さては貴方、昨日の夜もサボつてたのね！！」

咲夜が無数のナイフを出す。

咲夜「串刺しになりなさい！！」

無数のナイフは美鈴目掛けて飛ぶ。

美鈴がもうスピードで逃げる。

だがナイフは物凄い速さで美鈴を追いかける。

美鈴「あああああーーー！」

美鈴の悲鳴が聞こえる。

瀬世羅木「・・・美鈴さん・・・かわいそつこ・・・」

咲夜「ふんっ！」

咲夜が腕を組む。

咲夜が瀬世羅木を見る。

咲夜「何か顔色が悪いですよ。」

瀬世羅木「・・ちょっと、あつまして。」

咲夜「そうですか。」

咲夜が懐中時計を出した。

咲夜の姿が消えた。

向こうの方から美鈴が帰つて來た。

美鈴「咲夜さんは、もういなくなつたんですね。」

服がズタズタだ。

瀬世羅木「・・ええ、今さつき。」

美鈴「そう。ところで貴方は誰なんですか？」

瀬世羅木「・・瀬世羅木努です。」

美鈴「瀬世羅木努？。変わつた名前ですね。」

瀬世羅木「ちゃんとした本名ですよ。・・たぶん…。」

美鈴が瀬世羅木をまじまじと見る。

美鈴「随分、ひょろい体ですね。とても、男の人とは思えない。」

美鈴が笑う。

瀬世羅木は頭をなせる。

瀬世羅木「痛いところを突くな。」

瀬世羅木は心の中で呟く。

瀬世羅木「・・そう言えば。最初に美鈴さんに会つた時、パンチを喰らつて、凄く痛かつたな。でも何でだ。」

瀬世羅木はライターの入つてるポケットを見る。

瀬世羅木「まだ、守られてなかつたのかな？」

「

美鈴「それでは、私は寝ますので。誰か来たら起こして下さいね。」

瀬世羅木「いや、いや、何ですか？」

美鈴が首を傾げる。

美鈴「あれ、新しい門番じゃないの?！」

瀬世羅木はため息が出る。

瀬世羅木「ダメだこりゃ。」

美鈴はあつといつ間に寝てしまった。

瀬世羅木は紅魔館の中に戻つた。

部屋に戻る。

瀬世羅木「何だこれ？」

瀬世羅木は机に置かれてる紙を見る。

瀬世羅木「何々。」

名前はレミリアと書かれてる。

レミリア「貴方の運命、それを私の能力で修正出来るかも知れないわ。夜、図書館で待ってるわ。」

瀬世羅木は紙を机に置いた。

瀬世羅木「レミリア。」

夜になり瀬世羅木は図書館に行く。

図書館の扉を押す。

瀬世羅木は周りを見る。

レミリアとパチュリーがテーブルに座っている。

レミリア「待っていたわ。貴方の運命、私が修正するわ。」

瀬世羅木「レミリア…。俺は死んでる者かも知れないんだ。死んでる者の運命を変える何て出来るのか？」

レミリア「まだ、確定した訳では無いわ。貴方は死んだと思つているかも知れないけど私の能力でそれを変えるわ。」

レミリア「パチエ！。お願い。」

パチュリー「分かつたわ。」

パチュリーは「究極の禁魔法書」と書かれている本をあける。

瀬世羅木「パチュリー、それ禁魔法って書いてあるよ。」

パチュリー「そうよ。レミィをこれから貴方の記憶の中に飛ばすわ。
・・・本当はこんな事はいけないんだけど、レミィと私と皆は貴方
の友人だもん！！」

瀬世羅木は涙が出る。

瀬世羅木「・・ありがとつ・・。」

パチュリー「レミィー！いくわよーー。」

レミリア「分かつたわーー。」

レミリアの体が光る。

パチュリー「瀬世羅木！貴方も椅子に座つてー。」

瀬世羅木は椅子に座つた。

レミリアがテーブルに顔を置き目を瞑る。

瀬世羅木も目を瞑る。

レミコアの体の輝きが消えて行く。

パチュリー「レミ、頼むわよ。」

パチュリーは本を閉じた。

運命（前編）（後書き）

第8章も終りました。今回は前編です。レミリアは瀬世羅木の記憶の中に行く。その中でレミリアは本当の真実をしる。次回はレミリアが優先に物語が進む。次の「運命」（後編）でお会いします。

運命（後編）

レミリアは異次元をさ迷よつてゐる。

レミリア「瀬世羅木。」

物凄い光りに包まれる。

見た事の無い部屋の中だ。

レミリア「此所は、一体。」

レミリアが奥の方に行く。

レミリア「！。瀬世羅木。」

レミリアが瀬世羅木の体を揺らす。

瀬世羅木「……ん？」

瀬世羅木は目を覚ます。

瀬世羅木は驚く。

瀬世羅木「あつ、貴方は？」

レミリアが微笑む。

レミリア「私は、幻想郷の一人で紅魔館の主のレミリアスカーレッ

トよ。」

瀬世羅木は首を傾げる。

瀬世羅木「レミリアスカーレット！？」

瀬世羅木はまじまじと見る。

だが、瀬世羅木は何が何だか分からなくなつた。

瀬世羅木「何て事だ。俺は物語を書いつとしていて現実と夢が“じち
や”じちやになつてしまつたのか。」

レミリア「“じちや”じちやになつていないわ。貴方は今、現実を見て
るのよ。」

瀬世羅木は頭の整理をする。

瀬世羅木「レミリア殿、一体何でこうなつたか分からないが、会え
て感謝する。」

瀬世羅木は微笑む。

レミリア「单刀直入に言つわ。貴方は幻想郷の紅魔館に来てそこで
私達、紅魔館の皆と会つてゐるのよ。」

瀬世羅木「まさか。」

瀬世羅木は笑う。

レミコアの表情が真剣になる。

レミコア「瀬世羅木。なら私が何で此所にいるか分からぬの?」

瀬世羅木は考える。

瀬世羅木「……。話を聞かせてくれ。レミコア殿が来た訳を。」

レミコア「幻想郷に来てる貴方の話だと、夢の中でこの世界の貴方が死んでいる、と言うのよ。その原因を知る為に来たのよ。」

瀬世羅木「……俺が死んでいる……。」

瀬世羅木はつつ向く。

瀬世羅木「……で、俺をどうするんだ。」

レミコア「貴方を助けるのよ!。他に何があるかしら?」

瀬世羅木「・・俺を助けるか。まさかゲームの世界の人物が俺を助けてくれるとは……。」

瀬世羅木は立ち上がる。

瀬世羅木「俺は貴方を信じる。俺が一番に尊敬する人物。その方が嘘を言うとは思えない。」

レミコア「ありがとう。瀬世羅木。」

瀬世羅木「で、俺が死ぬと言つのは、一体どんな風に死ぬんだ。」

レミリア「それは聞いていないわ……。」

?「それは、今から俺がお前を殺すからわー!。」

レミリア&瀬世羅木「誰!?!?。」

二人は声の方を向く。

レミリアと瀬世羅木は驚いた。

二人の目線に瀬世羅木努が立っているからだ。

努は恐ろしい表情で瀬世羅木を見る。

努「俺は悔いに悔いた。お前が幻想郷に行きもしなかつたら、この俺は死なずに済んだんだ!!。」

瀬世羅木「一体、何を言つてるか分からぬ!!。」

努「俺は幻想郷の紅魔館に迷い殺されたんだ!!。そこにいる人物に!!!。」

努はレミリアを指差す。

レミリア「何を言つてゐるの!?!。私は貴方を殺してなんかいないわ!。」

努「人にグングールを2回も放つてよくそんな事が言えるな!!。」

レミコア「2回?。そんな筈は無いわ。私は
1回だけ放つただけよ……。」

瀬世羅木「パラレルワールドだ。」

レミコア「えつ?」

瀬世羅木「つまり、貴方と仲良くなる俺がいるみたいにそこの逆に俺
が殺される世界もあると言つ事だ。」

レミコア「…そんな…。」

努はレーヴァテインを持つ。

レミコア「そればフランの!?。」

瀬世羅木「何て事だ!自分自身に殺されるのか?」

レミコアは努の前に立つ。

レミコア「…私は貴方を殺したのね。その責任はちやんと取る
わ…。」

努「さすが、俺が一時は尊敬した人物だ。」

努はニヤ付く。

瀬世羅木「レミコア殿!止すんだ!…。」

努はレミコアの方に走る。

レミコアの頭上に努がレー・ヴァ・テインを振り上げる。

努はレー・ヴァ・テインを降り下ろした。

「ガンツ。」

レー・ヴァ・テインは直撃した、瀬世羅木の頭に。

レミコア「瀬世羅木！-！」

瀬世羅木「ぐつ！-！」

瀬世羅木の頭から大量の血が出る。

瀬世羅木は倒れる。

努「使っているのが俺だけにパワーが無かつたな。」

レミコアは瀬世羅木の体を揺らす。

レミコア「瀬世羅木！、瀬世羅木！」

瀬世羅木は目を開ける。

瀬世羅木「・・・だつだつ大丈夫だ・・。俺自信だ、力はそんなに無いのは知っている……。」

瀬世羅木は目を瞑る。

努「次はお前だ！……。」

努はレミコアを見る。

レミコアの瞳が輝く。

レミコア「瀬世羅木。自分自身とは言え。どんなにも無い事をしたわ
ね……。」

レミコアは努を睨む。

努「その表情だ。俺を殺した時のその表情！。」

努は恐ろしげ表情でレミコアを見る。

レミコア「……貴方には……もつ一度死んで貰つわーー。」

レミコアは右手を広げグングニルを出した。

右腕を上げ先端を努に向ける。

努「こんな所でそんな物を放つて良いのか？。部屋が跡形も無くな
るが。」

レミコアは首を横に振る。

レミコア「いいえ、此所は瀬世羅木の記憶の中。部屋にダメージは
無いわ。・・でも、貴方は別よ。」

レミコアは右腕に最高に勢いをつける。

努「待つてくれ！..。お前はそれを本気で投げれるつもりなのか！？」

レミコア「聞く耳持たないわ！」

レミコアはグングニルを投げた。

努は飛んでくるグングニルを見る。

努「ふつ。今そこで、倒れてる俺がうらやましいぜ。..。俺は本当についてないよ。」

「ドッカーン！..！」

グングニルは大爆発した。

煙が立つ。

レミコア「..。」

煙が止んで来た。

努の姿は無い。

レミコア「瀬世羅木！..。」

レミコアは瀬世羅木を起こす。

瀬世羅木「..。もう一人の..。俺は、消えたのか？。」

レミリアが頷く。

レミリア「ええ、消えたわ。」

瀬世羅木はタオルを取り頭を押さえる。

瀬世羅木「俺の奴、本気で当てやがつて。」

瀬世羅木の頭の血は止まつて來てる。

瀬世羅木「何とか、大量出血にはならずに済んだ。」

レミリア「瀬世羅木。貴方、あれを持つてるよね?」

瀬世羅木「あれとは何だ?。」

レミリア「私が書いたライターよ。」

瀬世羅木「ああ、確かに持つてる。一体何に使つんだ?」

レミリア「それに私の力を入れるわ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターを
レミリアに渡した。

レミリアはライターを受け取り強く握る。

ライターが輝く。

輝きは止みライターを瀬世羅木に返した。

瀬世羅木「何をしたんだ？」

レミリア「私の能力。運命操る能力を込めたのよ。」

瀬世羅木「運命操る？」

レミリア「ええ、そうよ。それで貴方は自分の危険を感じた時にその力が貴方を守ってくれるわ。」

瀬世羅木「ありがと。」

レミリアは微笑む。

レミリア「これで貴方は死んで無い事になつたわ。私もこれで帰る事が出来るわ。」

レミリアは立ち上がる。

瀬世羅木「レミリア殿、又、貴方に会えますかな？」

レミリア「ええ。」

瀬世羅木「その時に又、貴方にお礼を言います。」

レミリア「悪いけど、それは出来ないわ。貴方は今、此所で起きた記憶は残らない。でも、貴方が来た時に必ずこの事は伝えてあげるわ。」

瀬世羅木「分かりました。」

レミコアの体が輝く。

パチュリー「レミコア。」

パチュリーの声だ。

レミコア「パチュ。」

紅魔館の図書館でレミコアは田を覚ます。

パチュリー「上手く行つたのね。」

レミコア「瀬世羅木は！？」

パチュリー「田を熙つてゐわ。そろそろ起きる頃よ。」

レミコアが瀬世羅木の方に行く。

レミコア「瀬世羅木。」

瀬世羅木「・・・ん？」

瀬世羅木は田を覚ます。

瀬世羅木「レミコア。どうだった？」

レミコア「ええ、貴方は死んで無い事になつたわ。別の世界の貴方が貴方を殺そうとしたのよ。でも私はその彼を…。」

レミリアは悲しい表情をする。

瀬世羅木「レミリア。そんな悲しい表情をしないで下さい。貴方は俺を倒したんじゃ無い、俺の邪心を倒してくれたんだ。」

レミリア「瀬世羅木。」

瀬世羅木「これで俺は、安心して物語を書いて行けるよ。本当にありがとう。」

瀬世羅木は微笑む。

レミリアも微笑み返した。

運命（後編）（後書き）

第9章も終りました。瀬世羅木はレミリアのおかげで現実世界で死んで無い事になりました。次回はフランが登場します。次回「フランの弾幕ごっこ」でお会いしましょう。

「フランの弾幕」

瀬世羅木は紅魔館の外の蛇口に水を出しタライに水を入れてる。

瀬世羅木「大分汚れてしまったな。落ちるかな？」

瀬世羅木は洗濯板を取つてハンカチを擦る。

瀬世羅木「おっ！。結構汚れが落ちる、落ちる」

レミコアが窓から瀬世羅木を見る。

努「待つてくれ！！。お前はそれを本気で投げれるつもりか！？。」

瀬世羅木の記憶の中に出来つた努の声が頭から離れない。

レミコア「・・・。」

パチュリー「レミィ。」

レミコアは声のする方を向く。

レミコア「・・珍しいわね。図書館を滅多に出ない貴方なのに？」

パチュリー「レミィの事が気になつたのよ。貴方、瀬世羅木にもう一人の瀬世羅木を倒したって言つた時、凄く悲しい顔をしてたから」

レミコアは外にいる瀬世羅木の方を向く。

レミコア「ええ、私は彼を殺したのよ……。この手で……。」

レミコアはうつ向いた。

パチュリー「でも、瀬世羅木はそれは違うと言つてくれたわ。レミコアが倒したのは彼の邪心だつて。」

レミコア「……でも、本人を殺した事には変わり無いわ……。」

パチュリー「レミコア……。」

瀬世羅木「レミコアは何処にいるのかな？」

瀬世羅木は洗濯を終えて紅魔館の廊下を歩いてる。

レミコアとパチュリーがいた。

瀬世羅木「レミコア。此所にいたのか。」

瀬世羅木はレミコアを見る。

レミコア「……。」

瀬世羅木「どうしたんだ? レミコア。」

パチュリーが瀬世羅木を掴む。

パチュリー「瀬世羅木、今は駄目よ。」

瀬世羅木はパチュリーに引っ張られて行つた。

瀬世羅木「ちよつ、ちよつ、これを渡すんだって！」

瀬世羅木はハンカチを持っている。

パチュリーはそのまま引っ張つて「行く。

瀬世羅木は部屋でパチュリーと話している。

瀬世羅木「・・・レミコアが...」

瀬世羅木は真剣な顔になる。

パチュリー「ええ、レミコアはその手で貴方を殺した事を深く気にしているわ。」

瀬世羅木は自分の頭をなせる。

瀬世羅木「俺は、気にしないで下をついて言ったのに。」

瀬世羅木はドアの方に行く。

パチュリー「何処へ行くの？」

瀬世羅木「レミコアの部屋だ。本当に気にしないで良いよ、っと言つてあげなきゃレミコアがかわいそう過ぎる。」

「バタン。」

瀬世羅木は廊下を歩いて階段をのぼる。

レニアの部屋のドアの前に着いた。

「ノンノン。」

瀬世羅木「レニア?」

返事が返つてくる。

レニア「……貴方と顔を会わせられないわ……」

瀬世羅木「レニア。俺の記憶の中で起きた事を気にしているんだ
わ。本当に気にしないで良いから。」

レニア「……」

返事が返つてこない。

だが。

レニア「入つて来なさい。」

瀬世羅木は部屋に入る。

レニアはうつ向いてる。

瀬世羅木「レニア。本当に気にしないで良いよ。貴方は俺の邪心
を倒してくれたんだ。俺を殺した訳ではない。」

レミリア「無理よ…。貴方の記憶の中で彼にグングールを放つ時、
彼が言つた言葉。その時は聞く耳持たないわ、って言つたけどあの
時の彼の言葉からは間違いなく哀しみが伝わつてたわ。」

瀬世羅木「ぐつ。」

瀬世羅木は言葉が出なくなつた。

瀬世羅木は考へる。

瀬世羅木「確かに。そうかも知れない。俺がレミリアを尊敬する人
物の様に、俺の邪心も同じ思いのはず。」

瀬世羅木はレミリアを見る。

瀬世羅木「…俺の責任だ…。何とかしなければ…。」

瀬世羅木は深く考へる。

瀬世羅木「よしつ、これだ!。」

瀬世羅木「レミリア。フランの所に行かないか?。」

レミリア「フランー?。」

レミリアは首を傾げる。

瀬世羅木「レミリアとフランじゃないと無理なんだ。」

レミリア「無理と言つのは?」

瀬世羅木「フランの弾幕^{じりつ}を見せて貰いたいんだ。」

レミコア「？？？」

瀬世羅木とレミコアは地下牢の方に歩いてる。

鉄の扉の前に着いた。

瀬世羅木は扉を開ける。

瀬世羅木とレミコアは中に入る。

フランが座ってる。

フラン「お姉様。」

フランがレミコアの方を向く。

レミコア「瀬世羅木が貴方の弾幕^{じりつ}を見たいんだって。」

フランが立つ。

フラン「弾幕^{じりつ}を見たいんだって。」

レミコアが頷く。

瀬世羅木「俺はそれをメモに書かせて貰う。フランの弾幕^{じりつ}を。」

「

フラン「でも、相手がいないと無理よ。」

瀬世羅木「相手はレミコアにやつて貰います。」

レミコアは驚く。

レミコア「瀬世羅木！それで私がいないと無理と言ったのねー。」

瀬世羅木「レミリア。」これは一つ頼む、俺はあいにく、只の人間でおまけに凄い非力なんだ。とてもじゃ無いがフランの相手は出来ない。」

瀬世羅木が頭を下げる。

レミコア「・・分かつたわ。」

フラン「お姉様と弾幕じつ。」楽しくなりそうだわ。」

レミコア「でも、瀬世羅木。私とフラン程の力よ貴方も巻き込まれるかも知れないわ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターを出した。

瀬世羅木「さつきパチュリーに新品にして貰つたんだ。直接俺に飛んで来なかつたら大丈夫だよ。」

レミコアは頷く。

レミコアはフランを見る。

レニア「フランー。本気で行くわよー。」

フラン「お姉様！私もよ。」

地下牢の中が凄い熱になつてた。

レニアは両手を広げグングニルを出した。

フランはレーヴァテインを右手に出した。

フラン「スター・ボウブレイク！！」

物凄い光が出る。

フラン「ふふ。」

フランはレニアの立つていた所を見る。

フラン「……」

レニア「後よ……」

レニアは右腕に最高に勢いをつける。

フランが向く。

レニアはグングニルを投げた。

「ドッカーン！……」

グングールが大爆発する。

レミコア「・・・。」

レミコアがグングールを放つた先フランの方を向く。

レミコア「！！！。」

レミコアの周りに緑色をした線が囲む。

フラン「お姉様！！。終わりよーー。」

フランがレーヴァテインを降り下ろす。

物凄い炎がレミコアをのみこむ。

フラン「やつたわ！！。」

レミコア「無駄よー。」

フランの後ろにレミリアが立っている。

フラン「さすがお姉様ね！」

レミコア「フラン。もひ、貴方も終わりよ。」

フラン「お姉様！。まだ終わらないわ。」

フランはレーヴァテインを天井に投げた。

レミリア「同時攻撃をはかる気ね。」

フランは両手を握りレニアに向ける。

レミリアは左腕に最高に勢いをつける。

フランの握る両手が輝く。

レーヴァテインが地面に落ちる。

レミリアはグングニルを投げた。

フランは両手を広げた。

レミリアのグングニルとフランのスター・ボウブレイクがぶつかり合う。

瀬世羅木「とてつもない力だ。」

瀬世羅木はメモを書く手が止まつた。

「レーベンハウゼン」

地下牢の壁にビビが凄い事になつてゐる。

「ドッカーン！ー！」

瀬世羅木「うわあーー！」

瀬世羅木は物凄い衝撃で飛ばされた。

瀬世羅木は壁にぶつかる。

瀬世羅木は直ぐにレミコアとフランの方を向く。

煙が立つて見えない。

瀬世羅木「どっちが勝つんだ？」

煙が止んで来た。

レミコアとフランは立っている。

フラン「お姉様やりますね……。」

レミコア「フラン貴方もよ……。」

「バタン！」

一人は倒れた。

瀬世羅木「レミリアー！ フラン！」

瀬世羅木は一人の方に行く。

レミコアとフランの体を揺らす。

レミコアとフランは立ち上がる。

瀬世羅木「ふう、良かった。」

レミコアはフランを見る。

フランもレミリアを見る。

レミコア「まさか、『かくなんてね。』

フラン「『かくなのは残念だわ。』

レミコアが瀬世羅木を向く。

レミコア「瀬世羅木。もつ少し続けた方が良いかしら？」

瀬世羅木は首を横に振る。

瀬世羅木「とつ、飛んでも無い。もう十分過ぎる程見せて貰ったよ。

」

レミコアは微笑む。

フラン「じゃあー、第一回戦。私と瀬世羅木の弾幕『じつじよーー。』

瀬世羅木「フランー。よしてくれー。俺なんかとやつてもあつけなさ過ぎて面白く無いと思つよ。」

フラン「ふーん。」

フランが腕を組む。

瀬世羅木はレミコアを向く。

瀬世羅木「レミリアどうだ？ 嫌な思い出も吹っ飛んだんじゃない
か？」

レミリア「そうね。貴方の言つ通り。私は貴方を殺したのでは無く、
貴方の邪心を倒してあげた。・・・それで本当に良いのかしら？」

瀬世羅木は頷く。

フランが一人を見る。

フラン「？？」

フランが首を傾げる。

「ガラッ…」

フラン「！…！」

天井の岩が外れた。

フラン「瀬世羅木！…天井！…！」

瀬世羅木はとつさに天井を向ぐ。

瀬世羅木「うわあああああ！…！」

「ハニの群舞」（後編）

第10章も終りました。見て頂いてる方に心より感謝します。瀬世羅木の頭上に舌が落ち様とする。彼はどうなるのか。次回「二んな筈では」でお会いしましょう。

「んな筈では

「ガラツ…」

フラン「瀬世羅木…天井…。」

瀬世羅木「うわあああああ…！」

「芝居…」

瀬世羅木「？？」

瀬世羅木は石から離れてる。

瀬世羅木「これは、一体？」

咲夜「危ないとこりでしたね。」

レミコア「咲夜。」

レミコアはほつとす。

フラン「瀬世羅木…。危なかつたわ。」

瀬世羅木は咲夜の方を向く。

瀬世羅木「咲夜さん。本当にありがとうございます。」

咲夜は微笑む。

レミコア「咲夜、貴方が瀬世羅木を助けてくれなかつたら危なかつたわ。」

瀬世羅木「でも、自分は守られてるんじや。」

レミコアが首を横に振る。

レミコア「それは、あくまで弾幕での話。君とかは当たつたらまずいわ。」

瀬世羅木の体が震えた。

瀬世羅木「咲夜さん。助けてくれた恩返しをさせて下さい。」

咲夜が又も微笑む。

咲夜「いいえ、恩返しなんて。」

レミコア「咲夜、瀬世羅木の言つ通りだわ。何か恩返しをされなさい。」

咲夜「そうですか。」

レミコアは瀬世羅木を向く。

レミコア「瀬世羅木。明日の一日だけ咲夜のお手伝いをしなさい。」

瀬世羅木は頭をなげる。

瀬世羅木「咲夜さんのお手伝いが。体が持つかな？」

レミコア「瀬世羅木。まさか今になつて返せませんーなんて言わな
いわよね。」

瀬世羅木「とつ、とんでもない。恩返しは必ずしますよ。」

レミコアが笑う。

咲夜「瀬世羅木さん。失礼かと思つますが、私よりも細いその体で
は…。」

瀬世羅木「つづー。」

瀬世羅木は痛いところを突かれたと言つ表情になる。

瀬世羅木「すいません!。まさかそこまで気にするとは思つません
でした。」

瀬世羅木は微笑む。

レミコア「もしかして?力もそんなに無いの?」

瀬世羅木「自分、学生時代、最強の非力男、と言われてた位ですか
ら……。」

レミコア「でも片付けはお手のものじゃないかしきり~。」

瀬世羅木「レミコア?。何でそつ脱つの?」

レミコア「貴方の記憶の中で、貴方の部屋を見たからよ。隨分綺麗

にしていたみたいだからね」

瀬世羅木「そうか…レミコアは俺の部屋を見てるのか。」

レミコア「咲夜。彼は掃除なら貴方の役に立つ筈よ。」

咲夜「掃除ですか。」

咲夜が瀬世羅木の方に行く。

咲夜「それでは明日、掃除をお願いします。」

瀬世羅木「なんか、緊張するな。」

レミコア「フラン。貴方も咲夜の手伝いをする。」

フランはそっぽを向いてる。

レミコア「フラン、又、来てあげるわ。」

瀬世羅木「フラン。ありがとうね。」

咲夜「フランドールお嬢様それでは明日。」

瀬世羅木達は地下牢を出た。

階段をのぼり廊下に出る。

瀬世羅木「咲夜さん。ちょっとすいません。」

瀬世羅木「ヨーヨー。」

瀬世羅木は咲夜に話す。

咲夜「分かりました。」

咲夜は在るもの瀬世羅木に渡した。

瀬世羅木「咲夜さん。ありがとうございます。」

瀬世羅木は部屋に戻る。

瀬世羅木「よし! 明日は頑張るぞ! ・・・その前に。」

瀬世羅木は部屋を出た。

朝が来た。

瀬世羅木はレミリアに咲夜の部屋を聞き咲夜の部屋のドアの前にいる。

瀬世羅木「咲夜さん。」

咲夜「はーい。」

咲夜がドアを開ける。

瀬世羅木を見る。

瀬世羅木はジャージ姿になつてゐる。

　　瀬世羅木「咲夜さん。」のジャージ、ピッタシですありがと「ひゞぎ」で
　　います。」

　　咲夜「本当は新しく来た時の掃除員に渡す服なので氣に入つて貰え
　　るかは分からなかつたのですが。」

　　瀬世羅木「とんでもないですよ。」

　　咲夜「それで、元々着ていた服は?」

　　瀬世羅木「それでしたら、紅魔館の隅の外で干してあります。」

　　瀬世羅木と咲夜は紅魔館の扉の前にいる。

　　咲夜「掃除を始める前にある人を起こしますよ。」

　　瀬世羅木「ある人とは?」

　　咲夜「いつもサボつている人ですよ。」

　　瀬世羅木「美鈴さんだ……。」

　　瀬世羅木は心の中で呟く。

　　瀬世羅木と咲夜は門の方に歩く。

　　咲夜「中国ーー。」

咲夜は門の外に出て立つ。

瀬世羅木も出る。

だが美鈴は起きてる。

美鈴「咲夜さん。私はずっと起きてますよ。」

咲夜は美鈴を見る。

咲夜「なら、何で、服がそんなにボロボロなの？」

美鈴「これは……。」

咲夜が美鈴を掴む。

咲夜「さては、貴方!!!。私が来る前にお嬢様に起こされたのね!!」

！」

咲夜がナイフを出す。

美鈴「咲夜さん!勘弁して下さい。お嬢様にドカンとやられたんですけどから。」

プチん。

咲夜の理性がキレる音だ。

咲夜「中国!!!。もう、勘弁出来ないわ!!!。」

瀬世羅木は門の中に入る。

美鈴「ああああああああーーー。」

門の外から美鈴の悲鳴が聞こえる。

瀬世羅木「美鈴さん……。本当にかわいそつに。」

咲夜が来た。

咲夜「まつたく、しょうがないわ！。」

咲夜は腕を組む。

咲夜は瀬世羅木を見る。

咲夜「次は貴方にお願いするわ。」

瀬世羅木は首をおもいつきり横に振る。

咲夜が笑う。

咲夜は瀬世羅木の手を持つ。

咲夜「今から時間を止めます。」

瀬世羅木「時間を止めると言つても自分は無理だと思います。」

咲夜は懐中時計を瀬世羅木に渡した。

咲夜「それを持つていれば大丈夫です。私が時間を止めても貴方もその中に入れます。」

咲夜は目を瞑る。

瀬世羅木「…？」

周りの動きが止まった。

咲夜「これで貴方に掃除を任せられます。」

瀬世羅木「でも、咲夜さん。時間を止めてると一日の時間が分からなくなるのでは？」

咲夜「あつ…。」

咲夜が笑う。

咲夜「大丈夫です。夜迄になる時間は私が図っておきます。」

瀬世羅木「咲夜さん。夜迄、何も食べないで大丈夫なのかな？。自分は別に一日位何とも無いけど。」

瀬世羅木は呟く。

瀬世羅木と咲夜は紅魔館の廊下から階段、各部屋、隅々まで掃除をしていく。

瀬世羅木「ふう、まだ、半分もいってないよ。」

瀬世羅木は咲夜を見る。

咲夜は凄いペースで掃除をしている。

瀬世羅木「……。こんな筈では、まさかこれ程までに広いなんて。

」

瀬世羅木は掃除を続ける。

紅魔館は見違える程綺麗になつた。

瀬世羅木「ふう、ほとんど咲夜さんがやつたみたいなもんだよ。」

咲夜が瀬世羅木の方に来る。

咲夜「本当に『苦労様です。』

瀬世羅木「いやあー。まさかこんなにきつことは、自分に意識があるのが不思議な位です。」

咲夜が微笑む。

瀬世羅木「咲夜さん。それで今はどの位の時間が経ちました?」

咲夜「……すいません。カウントしていませんでした……。」

瀬世羅木「そんな……。でも良いです。紅魔館の掃除のお手伝いが出来たので。」

咲夜は又、瀬世羅木の手を持つ。

咲夜「それでは、戻りましょう。」

咲夜は目を瞑る。

周りの動きが動いた。

だが。

瀬世羅木「咲夜さん！？夜になつてますよー。」

咲夜「もしかしたら、貴方に時計を貸した事で能力が少しずれたのかも知れません。」

咲夜は申しなさげな顔になる。

パチュリー「咲夜。」

咲夜はパチュリーの方を向く。

咲夜「パチュリー様。どうしたのですか？」

パチュリー「レミィがかんかんに怒ってるわよ。紅茶が飲めないって」

咲夜「そんな！？」

瀬世羅木は咲夜の方に行く。

瀬世羅木「咲夜さん。今日はありがとう。」

咲夜は頷くと姿が消えた。

瀬世羅木「あつー。咲夜さんの懐中時計！」

瀬世羅木は懐中時計を出す。

パチュリーが手を出す。

パチュリー「私が咲夜に渡すわ。貴方は今日は疲れてると思うから。

」

瀬世羅木「ありがとう。パチュリー。」

瀬世羅木はパチュリーに懐中時計を渡す。

瀬世羅木は紅魔館の隅の方に行き干してある自分の服を取った。

瀬世羅木「よし！乾いてる。」

瀬世羅木は部屋に戻る。

メモ帳に今日の事を書いてる。

瀬世羅木「こんな感じかな。」

瀬世羅木はメモ帳をしました。

「ガチヤン。」

部屋から誰か入って来た。

瀬世羅木「レミコア。」

レミコアが瀬世羅木の方に来る。

レミコア「ライターを見せてくれない?」

瀬世羅木「ライター。良じよ。」

瀬世羅木はポケットに手を入れライターをレミコアに渡した。

レミコア「・・・。」

レミコアはライターを受けとる。

レミコアはライターを自分のポケットに入れた。

瀬世羅木「レミコア。ライター返してよ。」

レミコア「いいえ、ライターは返さないわ。」

瀬世羅木は首を傾げる。

瀬世羅木「どうして?」

レミコア「それは・・・。」

瀬世羅木「それは?」

レミコア「貴方を殺すからよーーー。」

いんな箇では（後書き）

第11章も終りました。レミリアはいきなり瀬世羅木に恐ろしい事を言つ。彼を守る力のライターはレミリアに取られてしまった。彼は完全に無防備のままレミリアの能力を受ける事になる。次回「最大のグングール」でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6239y/>

東方 紅魔館物語

2011年11月23日16時48分発行